古典語複合動詞の後項「あふ」について

徳本　文

はじめに

「あふ＝あう」は上代から現代まで使い続けられている後項動詞であり、現代語でも使用頻度が非常に高い。そのためか、古典の現代語訳において古典語の「あふ」と現代語の「あう」が同じように相互動作として解釈され、意味の通りにくいことがしばしばある。

類義の後項動詞に「かわす＝かはす」があるが、これは現代語では使用頻度、生産性が高いとは言えない。林[1]（一九九六）によれば、「あふ＝あう」は古典語においても現代語においても使用頻度の非常に高い後項動詞であり、「かはす＝かわす」は現代語において結合力の衰退した後項動詞の一つである。また、前項動詞「あふ（あひ～）」も相互動作を表すが、これは現代語においては生産性を失っている。

本稿では、上代から平安時代にかけての資料から採取した複合動詞を中心に、『平安時代複合動詞索引』および『新編日本古典文学全集』のデータベースを用いて検索した複合動詞も加えて「～あふ」の用例を分析し、「～かはす」「あひ～」と比較することにより、その意味と歴史的な変遷について考察する。

なお、ここでいう「複合動詞」とは「動詞連用形＋動詞」の形のものとする。

一　後項動詞「あふ」の意味と分類

『古語大辞典』（小学館）では「あふ」を【合ふ】と【会ふ】の2項目に分けて記述している。【合ふ】の記述は「①一つになる。相和する。②つりあう。③合致する。④（動詞の連用形について）互いに…しあう。共同して…する。」、【会ふ】は「①会う。②偶然に出くわす。③面と向かう。④（男と女が）面会する。交合する。⑤対抗する」とある。『時代別国語大辞典上代編』に記述されている意味もほぼ同じで、あふ【逢・合・会】の意味として、「①合う。集合する。②逢う。遭遇する。③結婚する。④戦う。⑤二つのものがともにする動作であることを示す。a補助動

詞として用いられる場合　b接頭語として用いられる場合」とされている。このように、「あふ」の意味は幅広く、また、単独の動詞として用いられる場合と、動詞連用形に下接して補助動詞的に用いられる場合がある。複合動詞の後項としての「あふ」はすべてが補助動詞的な役割を持つわけではなく、単独の動詞としての意味をそのまま持つものと、補助動詞的な意味を持つものに分けられる。

筆者は動詞連用形＋動詞の形態の語を次のように分類している。

Ⅰ実質的＝前項・後項共に動詞としての実質的な意味を持つ。

A　前項と後項が意味上対等なもの（継起、並立、同時進行等）

これは前項と後項がそれぞれに別の概念を表すため、複合動詞とは認めにくい。

B　修飾関係＝前項と後項が修飾関係にあり、どちらかに重点がある。

Ⅱ形式化＝前項・後項のどちらか一方の動詞としての実質的意味が弱くなり、他方に対して補助的な役割を果たす。また、複数の動詞と結合し、造語機能を持つ。

A　接頭辞的用法　B　補助動詞的用法　C　転義

接頭辞化、補助動詞化の基準については、山本[2]（一九八四）を参考に、「文の主語との間に格関係が成立しない自動詞、前項、あるいは後項動詞の目的語との間に格関係が成立せず、独自の目的語も持たない他動詞は形式化している」とした。

二　古典語における後項動詞「あふ」

後項動詞「～あふ」は前述の通り、本来の動詞としての意味を保持しているものと、補助動詞的に使われているものに大別できるが、さらに補助動詞的用法の「あふ」を次の3種に分類した。

①　相互動作＝複数の主体による同一の動作で、互いを動作の対象とする、あるいは互いにその動作の影響を及ぼすもの。

②　同一動作＝複数の主体による同一の動作で、互いを動作の対象とせず、互いにその動作の影響も及ぼさないもの。

③　際会＝複数の主体による偶発的な同一の動作や、偶発的にその場面に遭遇することをあらわすもの。現代語では「いあわせる」等の「～あわせる」に当たる。

二・一　動詞「あふ」の補助動詞化

上代においては補助動詞的用法と認められる用例は見られない。たとえば、『万葉集』には後項動詞「あふ」は述べ17語、異なり語で12語あるが、どれも単独の動詞としての意味と格関係を保っている。「潜きあふ」「漕ぎあふ」「しぐひあふ」「行きあふ」などは「会ふ」つまり「対面」「邂逅」の意味である。たとえば、

1　おおふねに　をぶねひきそへ　かづくとも　しかのあらをに

表一

後項動詞あふ　　（　　）＝異なり語

		記紀歌謡	宣命	竹取	伊勢	土左	古今	後撰	拾遺	源氏
総　　数	17(12)	3(2)	0(0)	4(3)	3(3)	4(3)	0(0)	1(1)	5(3)	157(68)
本来の意味	17(12)	3(2)	0(0)	1(1)	2(2)	0(0)	0(0)	1(1)	4(2)	55(18)
補助動詞的	0(0)	0(0)	0(0)	3(2)	1(1)	4(3)	0(0)	0(0)	1(1)	105(51)
相互動作	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
同一動作	0(0)	0(0)	0(0)	3(2)	1(1)	4(3)	0(0)	0(0)	0(0)	77(47)
際　　会	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	1(1)	14(7)

かづきあはめやも
大船尓　小船引副　可豆久登毛　志賀乃荒雄尓　潜将相八方
（万葉集巻十六・三八六九）

2　たまほこの　みちにゆきあひて　よそめにも　みればよきこを　いつとかまたむ
玉桙之　道尓行相而　外目耳毛　見者吉子乎　何時鹿将待
（万葉集巻十二・二九四六）

1では「作者が潜く」「作者が（荒雄に）あふ」が成立し、2では「作者が行く」「作者が（娘に）あふ」が成立することから、これらは前項・後項共に本来の動詞としての意味を持っているといえる。

平安時代に入って補助動詞的用法の「あふ」が見られるようになる。たとえば『竹取物語』の「そしりあふ」という語を例に見てみる。

3　をのをの仰承りてまかり出ぬ。（中略）「かかるすき事をしたまふこと」とそしりあへり。　（竹取物語）

「大伴大納言の従者たちが（大納言を）そしる」は成立するが「従者たちがあふ」はこの文脈において成立しない。このことからこのような「あふ」は本来の意味と格関係を失って補助動詞化していると考えられる。

「あふ」を後項動詞とする複合動詞の主体には非生物も見られるが、これらの多くは補助動詞的用法とは考えられない。たとえば

4　あまのしらくも　わたつみの　おきつみやへに　たちわたりとのぐもりあひて
安麻能之良久母　和多都美能　於枳都美夜敝尓　多知和多里等能具毛利安比弖
（万葉・四一二二）

5　古道に我やまどはむいにしへの　野中の草はしげりあひにけり
（後撰・三七五）

6　月の隈なきに、雪の光りあひたる庭のありさまも
（源氏・賢木）

7　法華三昧おこなふ堂の懺法の声、山おろしにつきて聞こえくる、いと尊く、滝の音に響きあひたり。
（源氏・若紫）

4はいくつもの雲が、5は何本もの草が広がっているさまで、どちらも複数のものが一つになる意味である。6は月の光が雪の光とひとつになって輝きを増す＝反射するさま、7は懺法の声と滝の音が融合して聞こえることを表し、どれも単独の動詞としての「合ふ＝一体化」という意味を保持している。たとえば5では「草がしげる」「草と草があふ」、7では「懺法の声が響く」「懺法の声が滝の音にあふ」が成立することから、これらは補助動詞化していないものとする。一部例外はあるが、非生物主体による「～あふ」の多くは補助動詞化せずに単独の動詞の意味を保持し、これは現代語に至るまで変わらないものと思われる。

二・二　複数主体の同一動作を表す「～あふ」

『竹取物語』から『源氏物語』までの補助動詞的後項動詞「あふ」の意味は表一にある通り、ほとんどが単なる同一動作であり相互動作を表すものはない。

8　かくのぼるひとびとのなかに京よりくだりしときにみなひと子どもなかりき。いたれりしくににてぞ子うめるものどもありあへる。
（土左）

9　限りなくとほくも来にけるかなとわびあへるに
（伊勢・九段）

10　人がらのあはれに情ありし御心を、上の女房なども恋ひしのびあへり。
（源氏・桐壺）

11　御前なる人々もめであへり。
（源氏・少女）

12　「さも見苦しう。あらざりし御癖かな」と、御達も憎みあへり。
（源氏・夕霧）

13　古人どものまかで散らず、曹司曹司にさぶらひけるなど参うのぼり集まりて、いとうれしと思ひあへり。
（源氏・藤裏葉）

14　古代の人どもはものめでをしあへり。
（源氏・手習）

15　山の鳥ども、そこはかとなう囀りあひたり。
（源氏・若紫）

16　法師、童べも、涙を落しあへり。
（源氏・若紫）

17　みなおのおの加階しのぼりつつ、およすけあへるに
（源氏・少女）

18　この御供の人々のとかう行きちがひ、涼みあへるを見たまふ

なりけり。　（椎本）

3の『竹取物語』の例では大納言の従者たちが互いを「そしる」のではなくそれぞれが同じ対象＝大納言を「そしる」ことを表している。9の「わびあふ」もその場の人々がみな同じ心情になったということであり、その心情は互いへは向いていない。

『源氏物語』には後項動詞「あふ」が数多く用いられているが、これらも相互動作を表していない。たとえば、10の「恋ひしのびあふ」は、女房達が亡き桐壺更衣をしのぶという意味であり、女房達の感情は互いではなく、第三者である桐壺更衣に対するものである。同様に11は中宮の周囲の女房達がそろって紫の上をほめる、12は夕霧の不誠実に対して雲居雁の周囲の女性たちが皆苦々しく思うという意味で、どれも前項の表す感情が主体同士ではなく第三者に向いている。複数の主体の間に会話が成立している場合もあるが、「恋ひしのぶ」「憎む」等の動詞の対象が主体同士であるものはまったく見られない。また、8は土佐へ下るときは子供がおらず、土佐で子供を産んだ人が一人ならずいたという意味だが、この前項「あり」は17の「およすけあふ」の前項「およすく」、18の「すずみあふ」の「すずむ」と共にもともと影響を及ぼす対象を持たない語であり、相互動作ということはありえない。

以上のことから平安中期までの後項動詞「あふ」は相互動作を表さないと言えるだろう。

二・三　際会を表す「あふ」

『時代別国語大辞典室町時代編』の「あふ」に「ある動作が、たまたま特定の時点や場面に際会する」という記述があるが、これにあたると思われるものが『拾遺和歌集』に1語、『源氏物語』に7語[3]あった。

拾遺：すみあふ

源氏：あきあふ、おはしあふ、きあふ、まうであふ、まうできあふ、まゐりあふ、まゐりきあふ

19　万世をみかみの山のひびくには　野洲河の水澄みぞあひにける　（拾遺・六〇三）

20　妻戸の細目なるより、障子の開きあひたるを見入れたまふ。　（源氏・常夏）

21　月おもしろかりし夜、内裏よりまかではべるに、ある上人来あひて、この車にあひ乗りてはべれば　（源氏・帚木）

22　かき抱きて障子のもとに出でたまふにぞ、求めつる中将だつ人来あひたる。　（源氏・帚木）

23　をりしもうれしく参で来あひたるを。　（源氏・宿木）

19は三上山の山が鳴るのに呼応するように同じ時に麓の野洲川の水が澄み渡ったという意味、20は妻戸が細目に開いている時にちょうど障子も開いていたために部屋の中をのぞきこむことができたという描写である。21は話者が内裏から退出したちょうどそ

の時に知り合いの殿上人がやってきたので一緒に車に乗った、22は源氏が空蟬をかき抱いた時にちょうど女房がやってきた、23は薫が浮舟との偶然の出会いを喜ぶという場面である。どれも前項の動作・行為が偶然タイミングのよい、あるいは悪い場面に起こったことを表しており、同一動作でも相互動作でもない用法が現れていることがわかる。

二・四　『源氏』以降～鎌倉時代初期の「～あふ」

『平安時代複合動詞索引』から『源氏』以降の資料で相互動作を表す可能性のある「～あふ」を探したところ、24～26の例が見つかったので、検討してみた。

24　上達部二人立ちて向ひあひて　（栄花物語）

25　花山院中納言兼雅（略）定能、雅賢、実教など、蓮華王院にありし時、習ひあひたりしに具して　（梁塵秘抄口伝）

26　力極テ取合トモ輒ク難打シ。（ちからいみじくて　とりあふともたやすくうちがたし）　（今昔物語集）

27　四郎左衛門尉頼賢（略）為朝の固めて射合ひ切り合ひ戦ひける大炊御門西門を駆け避きて（略）散々にぞ戦ひたる。　（保元物語）

28　重盛の郎等、与三左衛門尉景康、鎌田にむずと組む。上になり下になり、組み合ひけるを（略）与三左衛門を討ち取る。　（平治物語）

29　薄手負ひてなほ返し合はせて戦ふもあり、火出づる程にぞもみ合ひける。　（平治物語）

30　即ち良正、声を揚げ案の如く討ち合ひ、命を棄てて各合戦す。即良正、揚声如案討合、棄命各合戦。　（将門記）

前述の通り、「あふ」にはそれだけで「面と向かう」という意味があるため、24の栄花物語の例はそれに当たるとも思われ、補助動詞的用法とするかどうかは難しいところである。25は訳では「互いに習いあって」となっているが、数人で一緒に習ったという解釈も成り立ち、前後の文脈から見ればむしろその方が妥当だと思われる。26の今昔物語集の例は相撲の描写の中の取り組み合うという意味で、これは相互動作と解してよいだろう。

次に、オンラインデータベース「新編日本古典文学全集」で検索したところ、鎌倉時代初期の成立と言われる『保元物語』『平治物語』の用例が見つかった。どれも軍記物の合戦の描写で、27は互いに向かって弓を射る、互いに切りつける、28は互いに取り組む、29は互いにもみ合うという意味で、相互動作と言ってよい。これらから、平安後期以降の、特に和漢混交文において後項動詞「あふ」に相互動作を表す用法が現れていたと言えるだろう。加藤[4]（二〇〇六）は「～あう（あふ）」は中世になってから新たな前項と結合した例が多いと指摘しているが、平安中期までは複数主体の同一動作と際会のみだった後項動詞「あふ」の意味が、相互動作にも広がったことによると考えられる。

また、30に示したように、記録体という変体漢文の一種である『将門記』に「討合＝討ち合ふ」という記述が見られる。今後、漢文との関係も探ってゆきたい。

三　後項動詞「かはす」について

『万葉集』から『源氏物語』の後項動詞「かはす」は表二通りである。

三・一　後項動詞「かはす」の補助動詞化について

31　みなとかぜ　さむくふくらし　なごのえに　つまよびかはし
たづさはになく
美奈刀可是　佐牟久布久良之　奈呉乃江尓　都麻欲妣可波之
多豆左波尓奈久
（万葉・二〇一八）

32　やすのかは　なかにへだててむかひたち　そでふりかはし
夜洲能河波　奈加尓敝太弖々　牟可比太知　蘇泥布利可波之
（万葉・四一二五）

『万葉集』における「～かはす」は異なり語で3語である。数は少ないが、「～あふ」とは異なり、単独の動詞としての意味と格関係を失っているため、上代においてすでに補助動詞化しているとして問題ないと思われる。たとえば、33の「ふりかはす」を例にとると、「袖をふる」は成立するが、「袖をかはす」は成立しないからである。

補助動詞的用法が多いが、わずかに本来の意味を保持しているものもある。「うちかはす」「さしかはす」等である。たとえば

33　白雲に羽うちかはしとぶ雁のかずさへ見ゆる秋のよの月
（古今集・一九一）

34　柏木と楓との、ものよりけに若やかなる色して枝さしかはしたるを
（源氏・柏木）

33は雁が羽を連ねて飛ぶの意で「雁が羽をかはす」が成立し、34は柏木と楓が枝を交差させるの意で「柏と楓が枝をかはす」が成立するため、前項が接頭辞的用法で、後項は本来の動詞の意味を保持しているものとする。

三・二　後項動詞「かはす」の意味

35　院にもいかに思さむ、故前坊の同じき御はらからといふ中にも、いみじう思ひかはしきこえさせたまひて　（源氏・葵）

36　尼君とはかなく戯れもしかはし、碁打ちなどしてぞ明かし暮らしたまふ。
（源氏・手習）

37　「あはれ、いと寒しや」「今年こそなりはひにも頼む所すくなく（略）北殿こそ聞きたまふや」など、言ひかはすも聞こゆ。
（源氏・夕顔）

38　夕ばへを見かはして、女もかかるありさまを思ひの外にあやしき心地はしながら
（源氏・夕顔）

39　かたみに宿る所も問ひかはして
（源氏・玉蔓）

40　古き契りの二つなきばかりをうき世の慰めにて、かたみにまたなく頼みかはしたまへり。
（源氏・橋姫）

表二

後項動詞かはす　（　　）＝異なり語

	万葉集	記紀歌謡	宣命	竹取	伊勢	土左	古今	後撰	拾遺	源氏
総　　数	5(3)	0(0)	0(0)	1(1)	3(3)	1(1)	1(1)	0(0)	0(0)	30(27)
本来の意味	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	1(1)	0(0)	0(0)	2(2)
補助動詞的	5(3)	0(0)	0(0)	1(1)	3(3)	1(1)	0(0)	0(0)	0(0)	28(25)

まず『万葉集』の例を見ると、主体はすべて生物で相互動作のみを表す。31ではたづが妻と互いに呼び合う、32では男女が互いに袖を振り合うという意味である。

『源氏物語』の「～かはす」も無生物主体はなく、すべて相互動作である。まず、13の「思ひあふ」と35の「思ひかはす」、14の「しあふ」と36の「しかはす」を比べてみる。13の「思ひあふ」は年老いた女房達がみなそれぞれにうれしいと思ったという意味であるが、35の「思ひかはす」は桐壺院と亡き東宮とは仲がよかった＝互いに大切に思っていたという意味である。14の「しあふ」は年寄りたちがみなこぞって薫の君をほめたことであるが、36の「しかはす」は浮舟が尼君とちょっとした冗談を言い合ったりすることを表している。この2例からも「あふ」と「かはす」の相違は明らかである。また、「言ひかはす」では37のようにAがBに言葉をかけ、BがAに返事をするという形の描写が多く見られ、一同が第三者について同時に同じことを言っているという「～あふ」とは異なり、その言葉が互いに向けられていることがわかる。さらに、39、40では「かたみに」という相互動作を表す副詞と共に用いられていることにも注目したい。このように、少なくとも『源氏物語』までは、「あふ」は主に同一動作、「かはす」は相互動作を表していたと言ってよいだろう。

『源氏物語』以降の「～かはす」については今後詳細に検討したいが、前述の加藤（二〇〇六）では、軍記物において「かわす（かはす）」が少ないことも指摘されている。「～かはす」は中世の軍記物に使われていないだけでなく、平安後期の説話集である『今昔物語集』にもまったく見[5]られない。前述の通り『今昔物語集』『保元物語』『平治物語』に相互動作の「あふ」が使われていることとあわせて、和漢混交文という文体との関連も検討すべきであろう。

四　前項動詞「あふ」の意味と変遷

古典語で複数の主体による同一の動作を表す語に、前項動詞「あふ」＝「あひ～」がある。「あひ」は辞書には「あふ」の用法の一つとして記述されると共に、接頭辞「あひ」としても項目を立てられている。本稿では、接頭辞的用法の複合動詞の前項として扱うこととする。「あひ」は、『時代別国語大辞典上代編』には「①動詞に接し、ともに・たがいに・いっしょにの意をそえる。②動詞に接しそれを強調する。」とある。下って、日葡辞書には

表三

前項動詞あふ　（　）＝異なり語

	万葉集	記紀歌謡	宣命	竹取	伊勢	土左	古今	後撰	拾遺	源氏
総　数	123(20)	3(2)	24(12)	2(1)	16(8)	0(0)	15(3)	17(3)	21(3)	62(16)
相互動作	101(14)	3(2)	4(4)	2(1)	15(7)	0(0)	15(3)	18(3)	20(3)	50(7)
同一動作	22(7)	0(0)	19(7)	0(0)	1(1)	0(0)	0(0)	0(0)	1(1)	7(4)
その他	0(0)	0(0)	1(1)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	5(5)

「この語は、また、一種の助辞であって、時にそれ自身は何の意味をも示さないで、動詞と合してそれに一種の力を添え、あるいは、優雅さを加える場合がある」と記述されており、この間に「あひ」の主たる意味が転じていることがうかがわれる。

『万葉集』から『源氏物語』の「あひ～」の意味を

① 相互動作＝複数の主体による同一の動作で、互いを動作の対象とする、あるいは互いにその動作の影響を及ぼすもの。

② 同一動作＝複数の主体による同一の動作で、互いを動作の対象とせず、互いにその動作の影響も及ぼさないもの。

③ その他＝単に言葉の調子を整えるもの。単独主体による動作はここに入れる。

の三種に分類したものが次の表である。

相互動作

41 あひみぬは　いくびささにも　あらなくに　ここだくあれは
こひつつもあるか
不相見者　幾久毛　不有國　幾許吾者　戀乍裳荒鹿
（万葉・六六五）

42 むかし、おとこ、いとうるはしき友ありけり。片時さらずあひ思ひけるを
（伊勢・四六段）

43 あひ知れる人、来とぶらひ
（源氏・帚木）

44 入道はかの国の得意にて、年ごろあひ語らひはべれど、私にいささかあひ恨むる事はべりて
（源氏・明石）

同一動作

45 こぞみてし　あきのつくよは　てらせども　あひみしいもは
いやとしさかる
去年見而之　秋乃月夜者　雖照　相見之妹者　弥年放
（万葉・二一一）

46 あめつちと　あひさかえむと　おほみやを　つかへまつれば
たふとくうれしき

天地与　相左可延牟等　大宮乎　都可倍麻都礼婆　貴久宇礼之伎　（万葉・四二七三）

47　ある上人来あひて、この車にあひ乗りてはべれば　（源氏・帚木）

45の「あひみる」は昨年の月を共に見た妹という意味であり、相互動作ではない。「あひみる」は相互動作の場合と同一動作の場合とがある。47の「あひのる」は車に同乗することであり、同一動作である。

その他

48　行に相応へ慈しび救ひ賜ふと　行爾相應天慈備救賜止　（続日本紀・宣命・天平神護二年十月二十日）

49　重き病をあひ助けてなん、参りてはべりし。（源氏・若菜下）

柏木が病をおして参上した

50　その御後はかばかしう相継ぐ人もなくて　（源氏・松風）

51　顔の色あひまさりて、常よりも光ると見えたまふ。　（源氏・紅葉賀）

52　小野にはべりつる尼どもあひ訪ひはべらんとて、まかり寄りたりしに　（源氏・手習）

48は仏が人々の勤行にこたえてくださるの意で、「あひこたふ」の主体は仏だけであり、49の「あひたすく」は柏木が病をおして参上したという意味で、主体は柏木一人である。50の「あひつぐ」は相続するの意、51は源氏の容色がひとしおまさるということであるから、主体は複数ではない。52も僧都が尼たちを訪ねる場面で、前後の文脈からいって互いに訪れ合うという意味ではなく、これらは単に語調を整えるものである。

このように、「あひ～」には三つの意味があり、表三に示した通り、『万葉集』では「あひ～」は総数123語、異なり語で20語であるが、『源氏物語』では総数62語、異なり語16語である。この数だけで単純に言い切ることはできないが、『源氏物語』の複合動詞の[6]総語数から考えると、時代とともに「あひ～」の使用頻度は減少していると言ってよいだろう。平安時代に入ってからの他の資料においても「あひ～」は「おもふ」「かたる」「みる」等ごく限られた後項動詞としか結合していない。

『万葉集』には、明らかに単独の主体による動作である、つまり相互動作でも同一動作でもないものは見られず、現在までのところ筆者が確認した単独主体による動作＝語調を整える「あひ～」のもっとも古い用例は48の宣命の例であるが、『万葉集』には解釈が諸説ある用例もあるため、今後さらに検討したい。『源氏物語』では単独主体の例が5例あり、これも多いとは言い難いが、「あひ～」全体の数が減る中で単独主体の例が現れていることから、このころには「あひ～」が本来持っていた複数の主体による動作を表すという機能が薄れつつあったと推察される。

五　まとめと今後の課題

『万葉集』から『源氏物語』を中心に、平安後期と鎌倉初期資

料も一部加えて「～あふ」の用例を検討し、「～かはす」と「あひ～」と比較した結果、次のようなことがわかった。

- 上代から平安中期までは「～あふ」は相互動作の意味はなく、主に同一動作を表し、相互動作は「～かはす」と「あひ～」が表していた。
- 平安時代には際会を表す「あひ～」が見られる。
- 平安後期から、和漢混交文に相互動作を表す「～あふ」が見られるようになる。
- 「あひ～」は上代から複数の主体による相互動作と同一動作を表していたが、時代が下るにつれて使用頻度と生産性が低くなり、複数の主体による動作という意味が徐々に薄れ、語調を整える役割が増えてゆく。

「～あふ」の意味の拡大と「あひ～」の意味の変化、「～かはす」の衰退＝造語力の低下が時代的に重なると思われるが、今後さらに詳細に検討してゆきたい。

《テキスト》

『万葉集』（おうふう、一九七七年）
日本古典文学大系『古代歌謡集』『竹取物語』『土左日記』『伊勢物語』
新日本古典文学大系『続日本紀』『古今和歌集』『後撰和歌集』『拾遺和歌集』
日本古典文学全集『源氏物語』
新編日本古典文学全集『栄花物語』『梁塵秘抄口伝』『今昔物語集』『保元物語』『平治物語』『将門記』

《参考文献》

東辻保和他『平安時代複合動詞索引』（清文堂、二〇〇三年）
伊藤博他『万葉集全注』（有斐閣、一九八三年）
北村季吟『八代集抄』（有精堂、一九六〇年）
阪倉篤義『語構成の研究』（角川書店、一九六六年）
関　一雄『国語複合動詞の研究』（笠間書院、一九七七年）
姫野昌子『複合動詞の構造と意味用法』（ひつじ書房、一九九九年）
『邦訳日葡辞書』（岩波書店、一九八〇年）

注

（1）林翠芳「古典語複合動詞から現代語複合動詞へ」『同志社国文学』44（同志社大学、一九九六年）

（2）山本清隆「複合動詞の格支配」（『都大論究』二一（東京都立大学、一九八四年）

（3）現在のところ前項の敬語は別の語として処理してあるため、「く」「おはす」「まゐる」はそれぞれ1語となっている。

（4）加藤奈保子「複合動詞の歴史的変遷　「～かはす」「～あふ」を例に」『語彙研究』3（語彙研究会、二〇〇六年）

（5）『平安時代複合動詞索引』に拠る。

（6）筆者の採取したデータでは、「動詞連用形＋動詞」の形態は、『万葉集』で二七一二、『源氏物語』で一五一四四である。

（とくもとあや　大学院後期課程在学生）